

Title	感覚及び知性作用の共通源泉：その発生論的探究の試み
Sub Title	Die gemeinsame Urquele von Sinnlichkeit : ein Versuch der genetischen Untersuchung
Author	井上, 坦(Inoue, Akira)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.39 (1961. 3) ,p.53- 71
JaLC DOI	
Abstract	1) Die Kritik der apriorischen Erkenntnislehre ist nötig, um die eigentliche Absicht der philosophischen Untersuchung, d.h, die Auffassung einer das umfassende Verstandnis der Welt ermöglichenden letzten Ursache durchzuführen. 2) Die Bedeutung der genetischen Methode kann man darin erblicken, dass diese Methode eine aposteriorische (contratranszendente Deduktion), empirische (contraphänomenologische Reduktion) und inhaltliche (contra linguistische Analyse) ist. 3) Der grundlegende Charakter des primitiven Erkennens beruht auf der einheitlichen Wahrnehmung, die der Lebensbegierde des Organismus entsprechende Gestaltqualitäten hat. 4) Die Homogenität der Sinnlichkeit und des Intellekts lässt sich darum von der ursprünglich instrumentalen Wesensart der Wahrnehmung aus klar verstehen. Den Unterschied zwischen Empfindungskraft und Intellekt kann man nur auf den Grad der Plastizität und Vielseitigkeit der Mittel zurückführen, 5) Die Korrelativität des Erkenntnisaktes und der Welt ist leicht aus der Tatsache zu erfassen, dass das Lebewesen sich in der Welt irgendwie wirkend verhält. Alle Erkenntnistätigkeit mit Inbegriff von Sinnlichkeit und Intellekt spielt, sozusagen, die Rolle der Vermittlung zwischen den zwei Kraftfeldern, nämlich dem Organismus und der äusseren Welt.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000039-0053">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000039-0053</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 感覚及び知性作用の共通源泉

——その発生論的探究の試み——

井 上 坦

- 一 認識のアプリオリズム批判
  - 二 発生論的方法の意味
  - 三 原初的認識活動の根本性格
  - 四 感覚と知性作用の連続性
  - 五 知覚及び概念作用と、世界との相関性
- 一

アリストテレス以来一般に哲学的認識の道は第一原因 (*πρῶτη αἰτία*) 即ち常により包括的な統一を可能ならしめる基盤の探究に存することは疑い得ざるところである。<sup>(註1)</sup> しかして、哲学がその探究においてアプリオリなるものとして

ある事柄（最広義の意味での）を認めることは、そこにおいて探究の努力を断き切る端初、即ち第一原因が現れたことを意味し、哲学的探究が如何にしてもそれを超えて進行する事の不能な地点の到達を意味する故に、能う限りアプリアリオリを認めることを避け、やむを得ずそれを認める場合にも、常にそれを超えてより深く遠く統一可能の地平を求めめることは、哲学的探究の基本的要請でなければならぬ。犀利なる中世の哲学者はそれを次の如く表現した。

Nunquam ponenda est pluralitas sine necessitate. (註2)

しかるに近代哲学者は、殊にカントを源泉とするイデアリスムスの流れにおいて、哲学的探究の方向を客観的實在より転じて主観乃至自意識に向わせたのみならず、その先験的認識論に際して幾多のアプリアリオリをもつて基礎づけを行わんとして来た。例えば、カントは純粹理性批判において、感性的直観（空間、時間）及び純粹悟性概念（カテゴリー）に先天性（Apriorität）を与え、しかも、この二つのアプリアリオリに対応する感覚と悟性という能力をそれぞれ全く異なつた心性の二つの源泉としてアプリアリオリに區別した。(註3)しかし人は今も猶これらのアプリアリオリ性を容認し、そこに立止ることができらるであろうか。カントが殆ど自明的に受取つた所の感覚と悟性の峻別は、直接的にはデカルトの爲した兩分、即ち延長あるもの（res extensae）と思惟するもの（res cogitantes）との兩分に由来し、(註4)さらに進行すればプラトンの二元論に迄到るところの二つの既成觀念なのであるが（プラトンにおける *doxa-aiōthōsis* と *epistēmē-aiōthōsis* の対立）(註5)一見自明的な対立を超えて両者を包括するより根源的なものを求める試みがこゝに於ても正になさるべきではなからうか。

プラトンの *doxa-ism* に対して經驗主義的であり、固定的な二元論的思考に対して、柔軟な一元論的態度を持していたアリストテレス、及びその影響の下に中世スコラ哲学にあつては、感性と知性はアプリアリオリに時空觀念及びカテ

ゴリーを有するとされることなく、又感性と知性相互の連関もより密接なものとされていた。Nihil est in intellectu, quod non fuerit in sensu なる方式もこれを示す。トマスは感覚に対してカント・ド・カルトの感性論より、遙るかに知性に近接した、類比的性格を認めている。「感覚的な認識は知性的な認識の全般的なかつ完全な原因であるといふことはできない」(non potest dici quod sensibilis cognitio sit totalis et perfecta causa intellectualis cognitionis) しかし、「何らかの意味で (知性的認識の) 原因の質料である」(quodammodo est materia causae) と言われているのである。<sup>(註6)</sup> cognitio sensibilis という言葉が使用されている事が見逃されてはならない。或いは又「感覚は自己が感覚していることを認識している」(sensus cognoscit se sentire)<sup>(註7)</sup> とも述べて感覚そのものの中にある程度の反省作用をすら認めているのである。

しかし、このでもやはり何故に感覚と知性という二つの作用に、人間認識を区分するのか、という根拠への吟味は充分でないように感じられる。表象 (phantasma) と概念 (conceptio) の質的な区別を仮定するのは必要やむを得ざることであろうか。或いは抽象作用 (abstractio) の有無が知性と感性の区別の規準であるのか。しかし私は感性にも既に所謂抽象作用は存在し、一方知性にのみ存すると言われた抽象作用も内容的にはこれと連続的なものとして、扱い得べきものなる事を後論で示したいと思うのである。

さらに私はこの根拠への反省を、現象学 (Phänomenologie) における「意識の志向性」(Intentionalität des Bewusstseins) なる概念にも及ぼしてみたいと思う。このにおいてはカントにおける如く、感性と知性の作用的区別はその出発点ではない。フッサールはそのような区別を否定して、より端的に所与の事態を、意識の志向性、又は、その志向的体験 (das intentionale Erlebnis)<sup>(註8)</sup> に求めた。この事は、カント的なる主観主義の立場から客観主義への転回

を意味し得るものではあつたが、しかし、フッサールにあつては、何故に意識はかく対象への志向性を有するかの問は遂に立てられなかつたのであり、加うるに、意識の志向性をもつばら純粹自我のノエシスとしてたゞ知性的な面のみ沿つて扱われて抽象化され、より広いかつ具体的な全体像において把握されていない。私はこゝに彼の余りに主知主義的な先天的本質主義の限界を見る。<sup>(註9)</sup>同時にこれは又彼が主観主義圏内にとどまるに終つた理由でもあろう。私は以下不完全ながら意識の志向性の根拠も知性と感覚の共通源泉に迄溯つて求めたいと考える。

一一

*nópn̄y aítta* を求める哲学にとつて、アプリアリを立てることは可能な限り避けられねばならぬこと、即ち最大限にアポステリオリズムを貫く試みが哲学本来の立場なることを述べて来たが、この意味でのアポステリオリズムは、語の広義の意味での「発生論的探究」(der genetische Versuch) と結合せざるを得ないであろう。

しかし、哲学的研究を発生論的方法をもつて遂行することに対しては強い異議が生ずるでもあろう。既にカントはかゝる発生論的方法をもつては畢竟事実問題 (quid facti) を扱い得るのみであるが、先験的哲学の中心問題は権利問題 (quid juris) にあり、従つて先験的演繹 (Transzendentele Deduktion) のみが唯一の方法であるとして経験的発生的方法を却りぞけた。<sup>(註1)</sup>しかしカントは既に「一切の経験から全然独立な、先天的純粹使用に定められている若干の概念」を措定して、その概念の使用権能を問題にするアプリアリオリズムの立場でかく発言しているのであつて、カントのアプリアリを超えた地平に進まんとする探究に対しては何等効力を有するものではない。

しかしして同じく主観主義的、観念論的傾向に属しながらも、フッサールは *zu den Sachen selbst* の標語の下に、その現象学的還元 (*die phänomenologische Reduktion*) の方法において、根本的現象への探究を広義のゲネティシユな操作に行なつたのである。しかし現象学的還元におけるゲネティシユな操作は飽く迄、アプリアリな本質及び本質関連の範囲にとどまるものであり、さらに純粹意識の立場に立ち一切の超越性を排拒する内在的なものである点で、ここに述べんとするゲネティシユな方法とは異なるものである。フッサールの現象学的方法においては、カントの知性と感性のモザイク的区別に対して全体としての意識の志向性が、感性直観の形式性に対して内容的本質が獲得された代りには、物自体論に示されていた存在論的傾向は余す所なく純粹意識に吸収され、内在化せられてしまつたのであつた。しかしかく徹底的な内在主義をとる結果はたゞちに現象学的自我のモナド化、歴史性と社会性との断絶という困難に陥込む。フッサール自身このことを自覚した故に、後年の彼の努力は「デカルト的省察」の相互主観性 (*Intersubjektivität*) の概念を経て、「危機」の論文における生命界の概念に及び、その方向において著るしく存在論的なものへの接近が覗かれるのであり、それは又経験的世界への還帰を暗示するものなのである。(一の註9参照) 事象そのものへの態度を貫くことはかくて経験的發生的方法によつてのみ可能であろう。しかし人は或いは、経験的發生的方法では事物の起源、機能を知り得ても本質を知り得ない、と問うかもしれぬ。事実、経験的發生的なるアポステリオリな立場での考究は、事物の所謂「本質」の認識に導かぬかもしれない。しかし「本質直視」(*Wesensschauung*) の対象たる本質についてどのような検証の方途があるであろうか。私は事物の本質認識はたゞ、経験的に観察可能な諸性質の認識、その起源、発生過程、機能の認識を通じて、それらの後に (*a posteriori*) しかもかなりの流動性と訂正可能性をもつて生じるものと考えるのである。

さらにゲネティシユな方法に対しては、論理分析派、言語分析派の哲学者よりも異議が提出されよう。彼等にとり哲学とは専ら言語のアプリオリな、その故に形式的な使用にのみ関心を有すべきものであり、「定義の形式的な結果が問題であつて、経験的事実の問題には無関係」なのである。<sup>(註2)</sup>この見地よりすれば認識という経験的事実の根拠を問う認識論は、その内容が経験的たる故に哲学固有の問題ではない事となり、心理学及び社会学という専門科学の問題であるにすぎないとされるのである。

しかし、私には哲学のこの定義、限界づけは余りに狭く思える。少くとも古来からの伝統的哲学の概念には、論理的言語学的分析以上のものが含まれている。哲学は勿論アプリオリを扱つて来たが、しかし同時に経験的な命題にも強い関心を示して来たのである。哲学的探究の目的は常に、世界及び世界における人間の位置についてのもつとも包括的な、一貫せる開明 (Erklärung) であつた。

認識論を發生論的方法で処理することは、認識論を心理学及び生物学に解消せしめることになるのではない。実験的専門科学として益々細分化し、局視的になりつゝある科学本来の傾向に対して、哲学の補い得るものは、包括的、総合的視野であり、世界と人間に関して、その都度のもつともプロバブルな視野を与えることにある。<sup>(註3)</sup>哲学は数学及び自然諸科学と並ぶ「精密学」(die exakte Wissenschaft) たることに自己の存在理由を求めず、却つて偽似科学 (pseudo-science) として、厳密性においては欠くるも、包括的、総合的視野に豊かな仮説を提供するところに自己の存在理由を置くべきであろう。そうしてこそアリストテレス以来の *Metaphysik* の真意が生かされるのではなからうか。

無論、この課題の遂行には幾多の困難がある。就中、経験的諸科学への通暁が浅い時は、仮説は単なる思い附きに

随する恐れがある。そのみではない。経験的科學自体の中でも、物理学、生物学、心理学と人間的なものへの関わりが深まるにつれて、基本的な理論そのものについての未解決な対立が存している。換言すれば、心理学においては生物学におけるよりその研究が仮説的性格を帯びている。このことはそこでは意識的、無意識的にかゝわらず、ある形での哲学が作用しているということである。これらの哲学的背景と事実の記述を分離しつゝ、これをさらに洗練された、包括的な哲学的文脈 (philosophical context) に持来らすことは容易なことではない。

しかし人間の知性は實際上常にこの事をなして来たし、又なさざるを得ない<sup>(註4)</sup>。しかも従来の哲学的認識論は觀念論的たると實在論的たるを問わず、いずれも余りにも経験科學の諸研究に無関心に、事実そのものへの検証を行うこともなしに、認識という経験的事実に対してアプリアリ性に頼る陳述を繰返して来た。私がこゝに粗雑ながら展開せんとする認識に関する經驗的、生命論的探究の試みは、哲学本来の立場に帰らんとする一つの試みに他ならないのである。

### 三

發生論的方法の意味をより詳細に定義すれば、私はこの言葉をもつて、時間的により後なる形態を時間的により先なる形態に、同時に、複雑な形態をより単純な形態に還元して考察する方法を意味している。事物の生成の流れを逆転させる操作と言う事もできよう。

しかして、人類が生命体としてよりプリミティブな生命体から進化して来たという命題は、生物学的にほど確実な

命題であらう。<sup>(註1)</sup> 故に人間の認識活動の考究を発生論的に行うことは、認識活動をひとまず生命体の認識活動という、より広い、より単純な形態において考究しようとする試みに他ならない。又それは、幼児及び動物心理学的操作を要請することにもなるであらう。しかし人間存在は同時に社会——内——存在である。人間の認識活動は単純な個体の営みであるよりも深く社会的である点に他の生物と異なる特色をもつ。この点よりして社会——内——存在としての人間の認識活動を発生的に理解する為に、未開社会における人間認識の研究、即ち社会学的、人類学的操作の局面も重要な意義をもつであらう。人間の認識活動の上に大きな意味をもつ言語の形成が、たゞ社会的にのみ考え得られる故のみでも、この事は絶大な意義をもつのである。

(しかし本論文では紙数の関係で社会的側面をも扱うことは不可能で、専ら心理学的な側面に論述をしぼらざるを得ないが、それすらもはなはだ不完全なものたらざるを得なかつた。)

扱、従つてこゝでは、余りに一義的、図式的たることを警戒しながらも、考察の便宜の為、認識活動の根本性格たる生命欲求実現の為の用具性、その行動準備的な様態を明らかにする道を、まず、初生児の認識活動というプリミティブな平面から探究していききたいと考える。認識を貫ぬき規定する生命欲求の存在を我々はこゝに比較的明瞭に見得るであらう。

要素的なものが集合して初めて全体が構成可能であるという分析重視の見地からすれば、初生児の意識は個々の感覚の混沌たる集合であり、例えば、その視覚は光や色の混沌たる印象の集合で、恰かも画家の持つパレットの如き様相を示し、この混沌と雑多の中から成熟と経験というプロセスにより、始めて秩序づけられた知覚及び対象界が生じて来ることとなるであらう。ところが種々なる実験によれば初生児の知覚や認識は決してその様なものでないことが

実証されている。初生児は多数の無秩序な印象を持つのでなく、むしろ反対にごく少数のものしか持たないと言るのである。しかもその少数の印象も決して所謂「単純刺戟」に対応する「単純感覚」ではない。初生児が興味を持つ音は「単純な」音ではなくて人の声であり、「単純な」色ではなく人の顔である。既に生後二箇月で幼児は母の顔や声を微笑して迎えるし、四箇月目になると熟知している人と未知の人とに対して態度を異にするようになる。このような認識は到底単純感覚のカオスから引出し得ない性格のものである。明らかに初生児にあつて、顔色を読む、人の区別をするという認識は所謂単純感覚より原始的、根源的であり、カント或いは感覺的実証主義者がなす如くに純客観的な感覺要素と単なる推理的悟性の結合による認識成立という図式に当てはまり得ない一つの単一活動なのである。<sup>(註3)</sup>

表情の認識が実は根源的であるという事実は人間及び生命体一般の認識活動の理解に重要な一つの鍵を提供するものである。初生児はやがて生命体と非生命体の区別を有するようになるが、この弁別の根拠も具体的には対象の持つ表情の区別によるものであると考えられはしないだろうか。即ち幼児にとつてはマッチの棒や茶碗は蛇や蛙よりも表情をもつことが少ないと感得されるのである。知覚の分化、認識の進歩は強い表情をもつものと弱い表情しかもたないものとを分離することによつて初まるのである。これと並行し密接に関連しながら、幼児は強い明らかな表情や身振りを持ったものは彼の要求に従うか抵抗するかであること、従つてそのようなものに対しては、表情や身振りの弱い鈍いもの即ち非生命体に対するのは異なつた態度で接しなくてはならぬことを知るであらう。<sup>(註4)</sup>かくして幼児は生命体と非生命体の区別を行い得るようになるのである。この場合、生命体と非生命体との弁別の根拠は主体に対する対象の態度、又主体自身の対象に対する實際的行動の一つの結果として現われて来るのである。幼児自身の生命関心

が対象判断の基盤となつているのである。表情や身振りが何故幼児の原初認識でいち早く認識対象となつたか、それは私にはそれらが幼児の生命関心にもつとも密接な関連を持つ故だと考えられるのである。この推論をさらに展開してみよう。幼児の身体的成熟と共にその関心領域はひろがつていく。その時、動く対象、変化する対象に関心が寄せられるのは何故か。それは生命体の表情や動きを類比的な意味において、動くもの特に幼児の身体と遠近的運動をする対象は幼児にとり強い生命関心を引くものである故ではなからうか。換言すれば、ここには原始アニミズム的認識が存在すると推察される。そしてこの事実は単に幼児の認識構造にのみ適合するのではなく、さらに広く生命体一般の認知活動の基本的性質でもある。動物においてもその注意がもつばら動くものに向けられていることは容易に観察することが可能である。

さらに一つ原始的認識活動の重要な性格が附加えられねばならない。それは認識はこゝにおいては常に相対的、状況依存的であることである。動きといふ身振りといつてもそれは常に他の現存対象との比較においてのみ妥当するものなのである。ケエーラーの家鶏に対する選択訓練の実験結果もこの事実を確証する。<sup>(註5)</sup> その生存する状況と密接に関連し、その意味での相対性をもつて生命体の欲求乃至関心に応えて最広義の行動への予料を提供すること、かゝるダイナミックな性格こそ、凡ゆる認識活動の根本機能なのであると思われる。

図地過程の形成及び、所謂知覚ゲシュタルトの存在理由をも、窮極的には生命体の欲求に支えられた行動指針的なものに基礎づけ得るのではないか。知覚は潜在的脳髓的な行動である事を、リニャーノが既に指摘し、ピアジエも又「永遠の『物理的ゲシュタルト』の仮説が捨てらるべき事」を述べている。<sup>(註6)</sup> 知覚ゲシュタルトをかく機能的に解する時に、始めて知覚構造の歴史的発生、及び発展を説明し得るであろう。

要約すれば無数の個々の刺戟とその興奮は無秩序な集合としてでなく、常に一定の規準の下に取捨選択され、しかも形態<sup>ゲシュタルト</sup>として受取られるのであるが、この事は生命体の生命欲求にその根拠を置くと考えざるを得ないのである。知覚のゲシュタルトは生命体の環境適応の一つの現われものではなからうか。

この様に考察すれば、ゲシュタルト乃至パターンなる概念はおのずと目的論的性格をもつものと解され得るでもあらう。私は、ケエーラー等がゲシュタルトを目的論的に解さる事を拒否するに對して、その合目的な性格を認めなくてはならぬと考える。ケエーラーの如くに、純物理学的な場の概念に、生命体の知覚ゲシュタルトの根拠を求めめるのは、猶飛躍の感あるを免れない。目的なる言葉を使用することはケエーラーの導入した「見通し」(Einsicht)なる言葉にもよく適合するであらう。<sup>(註)</sup>勿論、安易な目的論に陥入ることは警戒されねばならない。しかし、因果法則をもつて説明の最高原理とする古典物理学的前提の不当な影響が、必要以上に目的概念を使用することを擬人主義的として避けさせてはいないだろうか。私は目的なる言葉を用いずに、一般に生命体についての記述が成立し得るとする見地は、機械論的偏見ではないかと考えるのである。

#### 四

生命体の認識活動は、生命の根源欲求に支えられ、貫ぬかれており、この限り合目的志向を本性とするものであることを述べて来たのであつたが、この見地よりすれば、人間の認識活動も又基本的にこの性格を分与すべきは当然である。人間の営む高次の認識活動、所謂知性認識にあつても、より低次の生命体の認識活動、所謂感覚、知覚認識

においてと同様に、深く実践的な *πράξις* 的な刻印が押されているのである。生理学者 H・ピエロンは感覚をば「生命の道案内者」(*guide de la vie*) と名づけた。<sup>(註)</sup>そして実はこの呼称は所謂知性乃至思惟に対しても当てはまるものと考へる。知性乃至思惟も、知覚と同様に、全体的状況との相互作用、即ち適応と制御という目的の下における生命体の活動の一部門なのであるから。

感覺的認識と知性的認識という古典的な分割は決して質的な断絶を伴なつた絶対的なものとは考へられない。両者は共に生命体の基本的欲求、状況適応及び状況制御の欲求に貫ぬかれ、共にその意味での実践的、合目的性格と機能をもつている類似作用にすぎないし、たゞこゝにおける差はかかる機能の複雑性、可塑性、転移性の程度の問題にすぎない。(往々この程度の差は驚く程大きいにもせよ)。如何にプリミティブなものであれ、生命体の行動には常に機械的反射行為以上のものが存しているのである。例えばハチスズメの巣づくりの過程において、何らかの意味でそこには一定の目的即ちこれこれの形態を有する巢の完成なる目的が現に存し、この目的達成の為に材料が選択採捨され配列されるのだと考へざるを得ない。こゝにも目的実現の爲の迂廻、或いは手段の系列化が起つていたのであつて、その限り、知的活動と極めて類似した行動なのである。人がしかしハチスズメの行動を知的乃至思惟的と云わずに本能的と呼ぶのは、ハチスズメのなした如き志向目的実現の型は固定的で、比較的に可塑性に乏しく、状況の変化に應じる柔軟性の程度が少ないからに他ならない。

しかし、例えばチンパンデーの行動の如きものとなれば、従来の觀念論哲学が人間にのみ固有の作用となした知的判断作用に著るしく近いものが現われることを否定することはできない。チンパンデーは状況に應じた可塑性に富む行動を、合目的的に取り得ることが、W・ケエラーの有名な実験でも示されている。この場合、最初無関心であつた

もの、又は噛んでいたものが、果物を手に入れる為の道具としての棒に使用されたこと、さらには、長くて動かせるものなら何でも棒としての機能価値をもつという事を習得したことは、チンパンジーが「知性的」であることを示すであろう。チンパンジーは道具の使用、障害物除去のみならず、道具の製作迄もある程度行つたのであつた。<sup>(註2)</sup>

しかしチンパンジーの道具使用は未だ程度の低い簡単なものにすぎない。人間においては道具制作及び使用は現存する生命体において最高の複雑性を示している。即ち人間にあつては目的を状況適応的、状況制御的に実現することは最大の可塑性と転移性をもつて行われ、目的実現に至る手段の系列は著るしく長くあり得る。そしてこの事実こそが人間の「知性的」な理由なのであり、又、人間の特異に発達した大脳、殊に前脳葉構造の存在と照応する事実なのである。

この主張はさらに今一つの実証的報告、即ち前脳葉傷害者についてなされたK・ゴルトシュタインの記述及び解釈とも一致している。被験者は彼の日常生活にあつて使用意味の明らかな図形に対しては、たとえそれが相当に複雑なものであつても容易に模倣できたのに対し、具体的経験から遠い、使用価値乃至機能の不明のものに対しては、それが簡単なものであつても模倣できなかつたのであつた。<sup>(註3)</sup> 彼には即ちものの使用機能が狭く固定化されているのであり、その意味で「抽象的」なものへの行動が困難であつたのだと考えられる。前脳葉損傷者が空のコップを飲む身振り、或いは実際に机上にない紙片を吹き飛ばす動作ができないという事、即ち「可能性の領域」における能力、想像的なものへの能力が欠けているという事も、同様の根拠によるものと考えたい。

ところで前脳葉傷害者に欠け、通常の人間の存する能力、即ち、可能的なもの、直接の具体的平面を超えたもの、抽象的なものへの能力が、生命体の目的志向的行動に際して、もつとも可塑性に富んだ、巾の広い通路を提供するこ

とは疑いない所であつて、これこそ正に既に述べたように知性活動の本質的なものなのである。

私はこゝで所謂「自己意識」の問題についても同様な見地より触れることとする。

生命体に内在する対象知覚作用、知覚における形態化作用そのものと、この作用の遂行をさらに知ること、対象化することは一応異なる発達段階に属するものである。所謂自己意識とは生命に本来的な目的志向性、及びこれに基づく状況認識活動の一つの極点に現われる現象であり、その明確度は多様な手段を使用し得る迄に発達した生命体が、目的にもつとも適応する手段を選ぶ中間段階、即ち広義の刺戟と行動との間の未決定的、中間的時間に対する指数であると考へる。

意識という語を何らかの意味での対象の知覚に解するならば、意識はすべての生命作用に附随的であろうが、しかし、意識を自己意識と解するならば、かく主張され得ると思う。自己意識は人間においてさえも常にあるとは限らない。人間にあつても、焦点を持った鋭い眞の自己意識から、下意识 (sub-consciousness) を経て無意識 (un-consciousness, Unbewußtsein) へと広い領域が広がっており、もつとも自己意識的な生命体たる人間にあつても、無意識の領域の広大性に比較すれば、意識のそれは氷山の一角にすぎぬものであることは、精神分析学、深層心理学の明らかにした所であつた。

さてこのような意識論によつて、初めて現象学の説く意識の志向性なる概念の根拠が示され得るのではないか。何故に意識は対象への志向性を持つのかという事の根拠は、たゞ、意識は生命の欲求を基礎とした認識活動のもつ形態化作用、或いは目的志向性作用の一つの現われであり、その故に状況内存在として、対象へ、プラグマティックに關係するという事に求められなくてはならないであろう。フッサールが晩年生命概念を重視したことは、彼自身この様な

生命論的解明への道を歩みだす事への萌芽であつたとも言い得るのではなからうか。<sup>(註4)</sup>

## 五

認識活動はそれが知覚的レベルであれ、知性的レベルであれ、すべて生命体のもつ根本的な目的志向作用、或いはその現われとしての形態化作用に基づいていゝとすることは、しかし決して認識の主観主義的解釈を試みることもなく、認識の客観性を認めぬ立場に立つことでもない。認識は深く実践的、行動的性格を持つ故に、却つて客観的であり、現実状況反映的たらねばならないのである。実に認識のかゝる性格こそ行動の有効性という規準に照らしての認識の客観性の保証を与え得るものと考ええる。

再びカントと対比すれば、カントが物自体と現象とを峻別して、人間の認識を現象界にのみ制限したこと、そしてその現象認識を、感性と悟性という無根拠な区別による<sup>(註1)</sup>とは言え、とにかく対象の単純な模写乃至反映と異なつた主体側の構成に求めたことは、あるいは本論文の論旨と類似する如く思われるかもしれない。しかし、私が述べた如く、認識が生命体の欲求に答へ得る為のものである為には、認識は現実そのものに即したものでなくてはならず、いわば、物自体の構造と照応するものでなければならぬのである。表象や概念がその根本性格において、行動の用具であるという正にその理由によつて、表象及び概念は現実の世界について有効でなくてはならず、従つてそれらは単なる恣意的な主観の構成でも、世界への主観の貼附物でもないのである。表象及び概念は外的現実世界及びそれを支配する諸法則と、内的生命欲求という二箇の力の場の間に立ちつゝ、両者の相互影響、相互適応を調整する媒介者の

機能をもつ限り、よしんばそこには文字通りの反映模写は存しなくて、切り取り、及び変形歪曲の作用が存するにせよ、窮極的には対象界との密接な相関関係を持つものなのである。すべての概念はカントの所謂「純粹悟性概念」を含めてすべてかくの如き意味で後天的、經驗發生的なものである。各個体に対しては確かにアプリオリと看做され得るものでも、種、乃至類的に見ればそれはアポステリオリな獲得に他ならないであろう。

ベルグソンの立場は遙るかにカントより本論文の立場に接近している。ベルグソンにあつては感覺認識も知性認識も共に生命の流れの中に根基を持ち、表象も概念も行動の為の実践的性格に色づけられて<sup>(註2)</sup>いる。しかし、こゝには又異なつた難点、即ち純粹持続 (durée pure) と延長 (étendu) との間の、換言すれば、實在の眞実の姿たる生成運動と、感覺殊に概念の空間性、静止的並列性との間の烈しい対立が、認識殊に知性的認識の有効性について困難を投げかけている。實在の時間性、運動性と、概念の空間性、静止性の対立が余りに厳しい為、こゝでは如何にしてそのような操作を行う知性が現実に対して生命の道具たる機能を果し得るのかが疑問とならざるを得ない。この難点はベルグソンが余りにも一面的に時間——持続的なものに實在を見た故に他ならない。

そして實に實在の中に存する延長的性格、即ち空間的、形態的性格こそ、本質的に空間化的、並列的性格をもつてゐる知覚及び知性が、世界に対して行動の手掛りを有効に提供し得る根拠をなしているのではないだろうか。

勿論こゝにいう空間化的性質とは、カント的な意味での絶対空間、感性のアプリオリな形式としての空間、の意味に解されてはならない。それはむしろ「場」という表現、或いはパターンという表現により、よりよく示される性格であると言ひ得よう。

我々の行動がとにかく世界の中で有効であつたし、又有効であるという事実が、知覚、概念が有効であり得る為の

対応を対象世界そのものが有しているという事の証明であろう。

しかし、通常の思惟や、古典的物理学は、実在をもつばら必然的な因果関係という仮定の下に、静止的、無時間的側面でのみ見ようとして来た。この一面的な誤謬に対してベルグソンの行なつた知性批判、及び純粹持続論は誠に有意味であつたと言わねばならない。しかし、生命の行動としての知性活動の中には、知性の持つ一面的空間化に自足する傾向を、自ずから打超える力が潜んでいる。既にベルグソンの哲学が現れ得たということ、そして実在の純粹持続の面をかくも明らかに、知性的に示し得たというその点に、知性のもつ広く深い適応性が示されていると思われるのである。そしてそれは又知性の基盤たる生命そのものの持つ絶えざる自己展開性の一つの現われではあるまいか。

1

- 註1 Aristoteles: *Metaphysica A* 983 a
- 註2 Occam, *William of*: I sent, I d, 27, 27 q 2K (*frustra fit per plura, quod potest fieri per pauciora* (*Summa Theol. I. 12*) の如き表現もある。)
- 註3 Kant: *Kritik der reinen Vernunft*. bes. S. 33~37. 102~116, S. 74. 但しカントは S. 29 で感性と悟性とを「恐るべし」の共通な、しかし我々には不可知な根から生じた二つの根」と呼んでゐる。(頁数はすべて第二版頁数。以下同様)
- 註4 Descartes: *Meditations touchant la première philosophie*. VI<sup>med.</sup>
- 註5 Platon: *Theaetetus* 160 c~186 c
- 註6 Aquinas, Thomas: *Summa Theol. I Q. 84, a 6. c*
- 註7 De Veritate, Q.I, a. q. c
- 註8 Husserl, E. *純粹現象学及現象学哲学考案* (岩波版) P. 119~136

註6 もともと晩年のフッサールには、Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie の論文を頂点とする生命界の存在論 (Ontologie der Lebenswelt) S. 176 の思想を以て著るべく存在論的又、生の哲学的な色彩を帯びて来たという事は注目すべき事である。彼はここで生命界を「自然科学の忘却していった意味基盤」と呼び (S. 48) 「先所与たる生命界からかく廻り問うこととする現象学的先験哲学への道」(Der Weg in die phänomenologische Transzendentalphilosophie in der Rückfrage von der vorgegebenen Lebenswelt aus) S. 105 を採るべきである。しかしこの試みが何処迄成功したかは疑問の余地が多い。(頁は Husserliana, Band VI 69-70)

二

註1 op. cit. S. 116f

註2 例えは Ayer, A. J.: Language, Truth and Logic (London 1946) chap II~III.

註3 この見解に「見類似するものは Jaspers における「経験的世界定位」(empirische Weltorientierung) と「哲学的世界定位」の関係であろう。しかしヤスパーズにあつてはそのカント主義的傾向の故か、哲学的世界定位は諸科学の世界像の妥当不可能性を示すこと、事実的世界定位の諸々の疑わしさを、探究するものとして (Philosophie, Bde I. Heiderberg 1956, S.3 18f) 寧ろ消極的な役割のものである。

註4 カントは「純粹理性批判」第一版序言の冒頭に述べている「人間の理性はその認識の一種類に於て特別な運命を持つてゐる——即ち理性は斥けようとしても斥ける事が出来ず、さればといつて、それに解答することもできない問題によつて悩まされてゐるといふ運命をもつてゐる」と。しかし問題の不可避性は確実にせよ、問題が解答不能であるとはア priori に答え得ないと考へる。

三

註1 ほら確實というのはカトリック系の古生物者、考古学者には猶この命題は經驗的裏附けのない想像的要素の強いものにあらずぬとする人もゐる故である。cf. Koppers, W.: Primitive Man and His World Picture (London 1952) 及び Portmann, A.: Vom Ursprung des Menschen, (Basle 1944)

註2 フォーの論は Koffka, K.: The Growth of the Mind (London 1925), Köhler, W.: Gestalt Psychology (London 1930) 及び Merleau-Ponty, M.: Le Structure du Comportement (Paris 1953) に負う所が多い。

註3 Koffka; Ibid. chapt III p. 148~152.

註4 Ibid, chapt VI

註5 Köhler: Gestalt Psychology p. 167<sup>註</sup> ケーラーは鶏のヒナに明るい灰色紙<sup>a</sup>と暗い灰色紙<sup>b</sup>に対し暗い灰色紙を取るよう食物の施与で条件つけた後に、明るい灰色紙の代わりに条件つけた灰色紙よりもつと暗い灰色紙<sup>c</sup>を使用した所、反応行動はその新しい紙<sup>c</sup>に対して生じたのであった。ケーラーは同様主旨の実験をチンパンジーに対し、形及び色の度合で行なつたが結果は同様であつた。ケーラーは「動物は全体としての一対物に反応し、一対のどちらも全体における「位置」に依存する明白な性格を持つ」と言つてゐる。

註6 ピンシエ：知能の心理学（波多野・滝沢訳、みすず）128頁

註7 Koffka はこの点でケーラーに対しより目的論的概念を行動に与えてゐる。cf. op. cit. chapt III. 「要するに反射運動も本能運動も知性運動もすべて合目的行動であり、その始端と終末とは即ち状況と反応行動とは常に外面的に連結されたものではなから」。(P. 120)

#### 四

註1 Piéron H: La Sensation (Que Sais-je? No 555) p. 7.

註2 Köhler: The Mentality of Apes (London, 1931) chapt II~V 殊に p. 31~39, 99~134.

註3 Goldstein: Human Nature in the Light of Psychopathology (Harvard U.P. 1947) chapt II 例えば対角線に左から右へ置かれた棒を三十秒の注視後で再生できないが、沢山の棒を使用した家の模倣は容易に遂行する。即ち個々の知覚、記憶、動作の欠陥の故でない事が判る。又図Aを模倣せよと棒を渡してもできない。しかるに図Bは容易に模倣する。前脳傷害者は、A図とB図は全く違うものでB図は屋根だが、A図は何の意味もないと言つたという。(図Aハ、図Bハ)

註4 (一)の註9を参照、又山本万二郎教授：「生命界」概念を中心とするフッサール後期思想の展開(三田哲学三七集)参照

#### 五

註1 Kant: op. cit. Die transzendentalte Ästhetik, Die transzendentalte Logik の部門参照

註2 Bergson, H: L'Evolution Creatrice (Paris 39<sup>e</sup> ed 1934) chapt IV.

La Pensée et le Mouvant (Paris 1934) chapt VI. L'Energie Spirituelle (19<sup>e</sup> ed, 1936) chapt I

感覚及び知性作用の共通源泉